社会で輝く青き星

ファイターズのOB紹介

3

加藤竜

RYU KATO

「ファイターズの基本形」

大学を卒業して、もうすぐ二十年が経とうとしている。大学に入学するまでの人生よりも、卒業してからの人生のほうが長くなっていくのだと考えると感慨深い。それだけの時間が経過しているにもかかわらず、ファイターズで過ごした日々が自分の中で薄れていくことはない。

入部したばかりの1991年のシーズンは関西リーグ6位となった翌年であり、その秋のリーグ戦も黒星スタート。悲壮感に包まれながら、それこそ薄氷を踏むように勝利を重ね、一敗同士で並んだ京大とのプレーオフを制して甲子園ボウルに駒を進めた劇的なシーズンであった。

高校まで福岡で過ごした私は、ファイターズがどのようなチームであるかをほとんど知らなかった。中学、高校では地区大会で敗退するようなチームにしか所属したことがなかったため、強いチームに憧れていた。強いチームと弱いチームはどこが違うのか。それを知るには強いチームに所属すればいいと考えていた。

高校までは強い対戦相手になす術もなくやられていた。全国大会に行くような学校と自分の学校では、そもそもメンバーの才能に違いがあるのだと諦めていたように思う。

ファイターズに入部して気づいたことは、ほとばしるような才能、あふれるほどの運動能力をもったメンバーが集まっているわけではないということだった。自分や高校までのチームメイトがそれほど劣っているようにも思えなかった。

違っているのは、チームが勝利に飢えているということだった。史上最低の成績となった翌年ということもあり、余計にそう感じたのかもしれない。涙がでるほど勝ちたい、祈るほど勝ちたい。そのためになす術は周到に用意する。それは才能あるメンバーが集まっているかどうかということとは別次元のものであった。

学生時代、同期の青山直樹（1994年主将）と過ごすことが多く、二人で将来を語るときには、青山は医療、私は会計の資格をとりたいと言っていた。青山は大学を卒業して一年後には国立大学の医学部に合格したが、私は受験勉強を始めることさえなく一般の企業に就職してしまった。このことがその後の人生において心残りとなっていた。

難関といわれる国家試験の受験生は学生か、一念発起して退職した社会人がほとんどであり、誰もが生活のすべてを受験に賭けている。そのなかで年一回の試験において上位数パーセントに入った者だけが合格するという世界である。いくら心残りがあるとはいえ、迂闊に飛び込むことはできなかった。私が公認会計士の受験勉強に専念するために会社を退職したのは三十三歳の時である。記憶力、計算力が落ちてくる頃、それでも受験の世界に飛び込めたのは、勝負の分かれ目は頭の良さといった先天的な能力ばかりでないことを知っていたからだ。受験生活は三年間続き、合格したときには三十六歳になっていた。

卒業後の人生において、日本一がミッションとなることはほとんどない。だからこそ、ファイターズで日本一をミッションとして過ごした日々が今もなお薄れることはなく、これからも基本型であり続けるのだと思う。

加藤竜（かとう・りゅう）／福岡県立宗像高校1990年3月卒業、関西学院大学1996年3月卒業（現役時DB、TE）2007年公認会計士2次試験合格、2007年から2010年新日本有限責任監査法人、2011年から現在まで辻・本郷税理士法人勤務、2012年公認会計士登録（近畿会）、2013年税理士登録（近畿税理士会）